The Journal of Kamakura Women's University, Vol.25, pp.123-130, January 2018

研究ノート

成人女性の生活意識と将来展望

―高齢期におけるソーシャルサポート期待の予備的検討―

大石　美佳（家政保健学科）・松永　しのぶ（昭和女子大学大学院生活機構研究科）

Life Consciousness and Future Outlook of Middle-aged Women: A Preliminary Study on Expectations for Social Support in Old Age

Mika Oishi[1] and Shinobu Matsunaga[2]
[1]Department of Home and Health Sciences, Kamakura Women's University
[2]Graduate School of Human Life Sciences, Showa Women's University

Abstract

In this study, middle-aged women's expectations for social support in old age were investigated. A questionnaire survey with responses from 76 middle-aged women was analyzed, and it was found that the women's highest expectation for social support in old age was from their children, followed by their partners. Subjective well-being was correlated with social support expectations from all support sources other than friends. The frequency of participation in social activities was positively correlated with social support expectations from friends and social services, and life circumstances and health status were positively correlated with social support expectations from siblings.

Key words: middle-aged women, life consciousness, future outlook, old age, social support, subjective well-being
キーワード：中年期女性、生活意識、将来展望、高齢期、ソーシャルサポート、主観的幸福感

１．問題と目的

わが国は世界でも有数の長寿国であり、2015年の日本女性の平均寿命は86.99歳であった（厚生労働省，2017）。長期にわたる高齢期の過ごし方が、個人にとっても社会にとっても重要なテーマとなっている。

ライフステージの中で中年期と位置づけられる50歳前後は人生の折り返し地点にあたる。特に女性にとっては、身体機能、職業、家族など様々な次元で変化の多いライフサイクル上の転換期であり、家庭内外における社会的関係（ソーシャルネットワーク）に変化が生じる。同時に、これまでの人生を振り返るとともに、これから迎える高齢期の生活に目を向け、将来に対する展望に質的な転換が起こる時期でもある（日潟，2008，2010；五十嵐・氏家，1999；都筑，2007）。

近年、生涯発達の観点から成人期以降の女性の発達に焦点を当てた研究が蓄積されており（柏木，

2003；岡本，1999)、成人期の発達過程を「個」としての発達と「関係性」の発達の双方の視点からとらえることの重要性が論じられている（岡本，1999)。

これらの研究知見を踏まえ、著者らは、成人期の発達過程を「個」と「関係性」の発達の2つの側面からとらえ、50歳前後の女性の現在の生活意識や生活状況と将来展望との関連を明らかにすることを目的として、一連の研究を進めている（大石・松永，2015；増淵・松永・大石，2016；松永・大石，2016)。

一連の研究において著者らは、関係性の発達をみる指標のひとつとして、ソーシャルサポートに着目した。ソーシャルサポートは、社会的関係において精神的・身体的健康を高めると考えられる特徴や機能、あるいは社会的ネットワークを通して得られる心理的・物質的資源を意味する多面的な構成概念である（種市，2006)。

ソーシャルサポートに関する研究アプローチは研究者によって様々であり、定義についても研究者間で一致した見解は得られていないが、個人を取り巻く様々な人や制度からの「有形無形の支え合い、助け合い」（森・三浦，2007）と考えて差し支えないであろう。多くの研究がソーシャルサポートは心理的・身体的健康にポジティブな影響を与えることを示している（Cohen, Gottlieb & Underwood, 2000 田中訳 2005)。特に高齢者を対象とした研究が多く行われており、ソーシャルサポートとQOL、心理的健康には正の関連があることが明らかになっている（福岡・橋本，2004；三浦・上里，2012；柳沢他，2002)。

ソーシャルネットワークの変容過程にある中年期女性が高齢期にどのようなソーシャルサポートを期待しているのか（以下、ソーシャルサポート期待）を検討することは、中年期の女性の将来展望の把握に有益な示唆をもたらすと考える。

そこで今回、著者らは、中年期女性のソーシャルサポート期待についてサポート源別（家族と家族以外のネットワーク）に検討し、さらに現在の生活状況や意識（社会的活動状況、暮らし向き、健康状態、主観的幸福感）とソーシャルサポート期待との関連について検討するために、予備的調査を行った。

2．方　法

(1)調査協力者および調査方法

50歳前後の女性200名に無記名の個別自記式質問紙調査を実施した。質問紙は主として著者らが所属する大学の学生を通じて配付を依頼し、直接または郵送にて回収を行った。99名から回答が得られた（回収率49.5%)。調査時期は2015年7月であった。データの統計分析には、SPSS ver.22.0を用いた。

調査協力者の年齢は、39歳以下2名（2.0%)、40～44歳2名（2.0%)、45～49歳39名（39.4%)、50～54歳40名（40.4%)、55～59歳13名（13.1%)、60歳以上2名（2.0%）であった。99名中91名（91.9%）が既婚であり、97名（98.0%）に子どもがいた。子どもがいる協力者のうち、95名（子どもがいる協力者の97.9%）に娘が、55名（子どもがいる協力者の56.7%）に息子がいた。

(2)調査内容

1)基本属性と現在の生活状況

年齢、家族状況（配偶者、子ども、自身のきょうだいの有無、子どもの人数)、就労状況、社会的活動への参加状況についてたずねた。

就労状況は、「正社員（職員)」、「パート／派遣／契約社員（職員)」、「無職」、「その他」から1つ選択してもらった。社会的活動への参加状況については、「子どもの教育に関わる活動」、「地域に関わる活動」、「趣味に関わる活動」、「学習に関わる活動」、「福祉に関わる活動」、「その他」から、現在参加している活動を複数回答で求めた。また、社会的活動への参加数を算出し「活動参加数」とした。

2)現在の生活意識

暮らし向き、健康状態、主観的幸福感についてたずねた。

暮らし向きについては、「ゆとりがある」(5点)、「ややゆとりがある」(4点)、「ふつう」(3点)、「やや苦しい」(2点)、「苦しい」(1点)、健康状

態については、「とてもよい」（5点）、「よい」（4点）、「ふつう」（3点）、「悪い」（2点）、「とても悪い」（1点）の5件法でそれぞれ回答を求めた。それぞれの平均値を算出し、「暮らし向き」得点、「健康状態」得点とした。

主観的幸福感を測定する尺度として、大石（2009）が邦訳したDiener, Emmons, Larsen & Griffin（1985）の人生の満足度尺度（Satisfaction With Life Scale；SWLS）を使用した。本尺度は、1因子構造で全5項目からなり、幸福感の測定として頻繁に使用されている尺度である。「全くあてはまらない」（1点）、「あまりあてはまらない」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「ややあてはまる」（4点）、「かなりあてはまる」（5点）の5件法で回答を求め、合計得点を算出し「主観的幸福感」得点とした。得点が高いほど「主観的幸福感」が高いことを示す。

3）高齢期におけるソーシャルサポート期待

高齢期の生活をイメージしたときに、まわりの人々からどのようなサポートが受けられると思うかをたずねた。先行研究（古谷他,2007；福岡, 2011；嶋, 1991；堤他, 2000；山岡・松永, 2013）を参考に独自に作成した14のサポート内容（「心配事や悩み事を相談できる」「気持ちを理解してくれる」「一緒にいてほっとする」「趣味や娯楽を一緒に楽しむ」「一緒に外出する」「気楽なおしゃべりを楽しむ」「家事をやったり手伝ったりしてくれる」「病気のときに世話をしてくれる」「経済的に困っているときに頼りにできる」「大事なことを決めなくてはならないとき、参考になる意見を言ってくれる」「いろいろな情報のやりとりをする」「困っているときに助言をしてくれる」「あなたのことを評価し、認めてくれる」「あなたの行動や考えを支持してくれる」）に対して、6つのサポート源（「パートナー」「子ども」「きょうだい」「友人」「近隣の人」「社会サービス」）別に、「まったくそう思わない」（1点）、「あまりそう思わない」（2点）、「まあそう思う」（3点）、「とてもそう思う」（4点）の4件法でそれぞれ回答を求めた。サポート源別に合計得点を算出し「ソーシャルサポート期待」得点とした。

（3）倫理的配慮

本研究は、鎌倉女子大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施された（承認番号:鎌倫－13011）。配付した質問紙に、研究の主旨、倫理的配慮について説明した文書を添付した。説明には、調査の目的、調査結果は研究の目的以外には使用しないこと、調査への参加は任意であり、参加の拒否による不利益は一切ないこと、得られたデータは個人が特定されない形で処理、分析し、調査データは責任をもって厳重に管理すること、回答したくない場合は空欄のままでよいこと、本研究に対する問い合わせ先などが含まれている。質問紙への回答をもって、調査協力の同意を得たものとみなした。

3．結果と考察

（1）分析対象者

ソーシャルサポート期待の6つサポート源のうち、「友人」「近隣の人」「社会サービス」は全員が利用可能であると想定できるが、「パートナー」「子ども」「きょうだい」については個人の基本属性によってはサポート受領が期待できない対象であるため、今回の分析では家族状況の質問に対して「配偶者」「子ども」「きょうだい」のいずれもが「いる」と回答した76名を分析の対象とした。

分析対象者（以下、対象者）の年齢は、40～44歳1名（1.3%）、45～49歳34名（44.7%）、50～54歳31名（40.8%）、55～59歳9名（11.8%）、60歳以上1名（1.3%）であった。76名中75名(98.7%）に娘が、39名（51.3%）に息子がいた。

（2）生活状況と生活意識

対象者の生活状況をTable 1に示す。76名中57名（75.0%）が有職者で、有職者のうち約半数がパート・派遣・契約社員などの非正規職員であった。社会的活動への参加状況は、参加していない人が24名（31.6%）で、約7割が何らかの活動に参加していた。最も多かったのは、習い事やスポーツなど「趣味に関わる活動」で35名（46.1%）、次いで保護者会やPTAなど「子どもの教育に関

わる活動」で17名（22.4%）であった。「活動参加数」の平均は、1.08個（0～3個，*SD*=0.95）であった。

暮らし向きは、「ゆとりがある」「ややゆとりがある」と回答した人が約3割、「ふつう」と回答した人が4割弱、「苦しい」「やや苦しい」と回答した人が約3割であり、「暮らし向き」得点の平均は3.04（*SD*＝0.97）であった。現在の健康状態は、「とてもよい」「よい」「ふつう」と回答した人が計72名（94.7%）とほとんどの人が良好と意識しており、「とても悪い」と回答した人はいなかった。「健康状態」得点の平均は3.29（*SD*=0.63）であった。

Table 1　分析対象者の生活状況

（*N*＝76）

		人数	(%)
就労状況	正社員（職員）	15	(19.7)
	パート／派遣／契約社員（職員）	35	(46.1)
	無職	19	(25.0)
	その他	7	(9.2)
社会的活動への参加状況（複数回答）	子どもの教育に関わる活動	17	(22.4)
	地域に関わる活動	15	(19.7)
	趣味に関わる活動	35	(46.1)
	学習に関わる活動	7	(9.2)
	福祉に関わる活動	7	(9.2)
	その他	1	(1.3)
暮らし向き	ゆとりがある	4	(5.3)
	ややゆとりがある	21	(27.6)
	ふつう	29	(38.2)
	やや苦しい	18	(23.7)
	苦しい	4	(5.3)
健康状態	とてもよい	3	(3.9)
	よい	20	(26.3)
	ふつう	49	(64.5)
	悪い	4	(5.3)
	とても悪い	0	(0.0)

また、「主観的幸福感」得点の平均は15.81（*SD*=3.41）であった。なお主観的幸福感の Cronbach の α 係数は、α＝.83であった。

今回の対象者は、経済的ゆとりと良好な健康状態を実感している人が多く、就労や社会的活動を通じて社会とのつながりも有し、心理社会的な適応が良好な集団であったことが推察される。

（3）高齢期におけるソーシャルサポート期待

サポート源別の「ソーシャルサポート期待」得点と各サポート内容の得点を Table2 に示す。

「ソーシャルサポート期待」得点が最も高かったのは「子ども」（43.94）で、次いで「パートナー」（41.93）であった。最も低かったのは「近隣の人」（28.69）であった。

サポート内容14項目についてみると、「経済的に困っているときに頼りにできる」はパートナー、「趣味や娯楽を一緒に楽しむ」は友人に対する期待度が最も高く、「大事なことを決めなくてはいけないとき、参考になる意見を言ってくれる」はパートナーと子どもに対する期待度が同点で一番高かった。それ以外の11項目はすべて子どもに対する期待度が最も高かった。将来展望において子どもとの関係を重視していることがうかがえた。

（4）生活状況、生活意識とソーシャルサポート期待との関連

現在の生活状況や生活意識と高齢期におけるソーシャルサポート期待との関連を検討した。

就労の有無でソーシャルサポート期待に違いがあるかをみるために、有職者と無職者のサポート源別「ソーシャルサポート期待」得点の差を検討したところ、いずれの「ソーシャルサポート期待」得点も有職者と無職者で有意な差はみられなかった（「パートナー」t（71）=-.04,；「子ども」t（70）=1.68；「きょうだい」t（64）=-0.24；「友人」t（65）=0.12；「近隣の人」t（65）=-0.58；「社会サービス」t（64）=-0.89,いずれも *n.s.*）。

次に「活動参加数」、「暮らし向き」得点、「健康状態」得点、「主観的幸福感」得点とサポート源別「ソーシャルサポート期待」得点との相関係数を算出した（Table3）。その結果、「活動参加数」は「友人」と「社会サービス」に対する「ソーシャルサポート期待」得点と有意な正の相関がみられた（それぞれ r=.29, r=.26, p<.05）。「暮らし向き」「健康状態」得点は、いずれも「きょうだい」への「ソーシャルサポート期待」得点と有意な正の相関がみられた（それぞれ r=.30, r=.25, p<.05）。また、「主観的幸福感」得点は、友人以外のすべてのサポート源へのサポート期待と有意な正の相関がみられた（r=.26～.39, p<.01～.05）。

以上より、現在の主観的幸福感が高いほど将来のサポート受領の期待が高いことが示された。また、中年期に社会的な活動に積極的な人ほど高齢

になった時に友人や社会サービスからサポートを得られるという将来展望を抱いていることがわかった。さらに高齢期におけるきょうだいとのつながりは、経済的ゆとりや良好な健康状態が基盤となっていることが推察された。

Table 2　高齢期に期待するソーシャルサポート（サポート源別の平均値と標準偏差）

		パートナー	子ども	きょうだい	友人	近隣の人	社会サービス
ソーシャルサポート期待得点	平均値	41.93	43.94	36.65	39.12	28.69	32.11
	(*SD*)	(9.55)	(5.40)	(9.33)	(6.55)	(7.33)	(7.81)
心配事や悩み事を相談できる	平均値	2.99	3.12	2.66	2.69	1.96	2.63
	(*SD*)	(0.88)	(0.59)	(0.87)	(0.79)	(0.76)	(0.64)
気持ちを理解してくれる	平均値	2.83	3.08	2.72	2.91	2.12	2.39
	(*SD*)	(0.81)	(0.54)	(0.76)	(0.65)	(0.73)	(0.69)
一緒にいてほっとする	平均値	2.88	3.26	2.59	2.93	2.12	2.13
	(*SD*)	(0.79)	(0.60)	(0.83)	(0.72)	(0.69)	(0.61)
趣味や娯楽を一緒に楽しむ	平均値	2.57	2.89	2.35	3.01	2.01	1.86
	(*SD*)	(0.92)	(0.76)	(0.82)	(0.70)	(0.73)	(0.68)
一緒に外出する	平均値	3.00	3.20	2.43	3.01	1.95	1.86
	(*SD*)	(0.85)	(0.65)	(0.90)	(0.74)	(0.71)	(0.70)
気軽なおしゃべりを楽しむ	平均値	2.95	3.43	2.96	3.37	2.53	2.19
	(*SD*)	(0.94)	(0.60)	(0.94)	(0.71)	(0.84)	(0.76)
家事をやったり手伝ったりしてくれる	平均値	2.85	2.92	2.04	1.92	1.68	2.49
	(*SD*)	(0.84)	(0.65)	(0.81)	(0.56)	(0.60)	(0.88)
病気のときに世話をしてくれる	平均値	3.07	3.15	2.16	2.03	1.70	2.51
	(*SD*)	(0.80)	(0.65)	(0.81)	(0.68)	(0.66)	(0.88)
経済的に困っているときに頼りにできる	平均値	3.31	2.53	2.14	1.57	1.35	1.82
	(*SD*)	(0.78)	(0.66)	(0.73)	(0.52)	(0.48)	(0.81)
大事なことを決めなくてはいけないとき、参考になる意見を言ってくれる	平均値	3.22	3.22	2.78	2.77	1.90	2.31
	(*SD*)	(0.83)	(0.58)	(0.90)	(0.84)	(0.73)	(0.84)
いろいろな情報のやりとりをする	平均値	3.04	3.29	2.81	3.11	2.49	2.58
	(*SD*)	(0.78)	(0.56)	(0.88)	(0.73)	(0.76)	(0.77)
困っているときに助言をしてくれる	平均値	3.16	3.21	2.83	3.03	2.26	2.61
	(*SD*)	(0.84)	(0.50)	(0.81)	(0.68)	(0.67)	(0.75)
あなたのことを評価し、認めてくれる	平均値	2.90	3.12	2.86	2.97	2.31	2.26
	(*SD*)	(0.82)	(0.57)	(0.75)	(0.63)	(0.71)	(0.68)
あなたの行動や考えを支持してくれる	平均値	3.04	3.18	2.86	3.03	2.33	2.38
	(*SD*)	(0.79)	(0.53)	(0.77)	(0.65)	(0.74)	(0.81)

最高値　最低値

Table 3　各変数間の相関

	活動参加数	暮らし向き	健康状態	主観的幸福感	ソーシャルサポート期待得点					
					パートナー	子ども	きょうだい	友人	近隣の人	社会サービス
パートナー	.02	.22	.30 *	.39 **	—	.69 **	.30 *	.15	.13	.40 **
子ども	.09	.10	.02	.32 **	.69 **	—	.42 **	.27 *	.18	.28 *
きょうだい	.21	.30 *	.25 *	.39 **	.30 *	.42 **	—	.50 **	.44 **	.32 *
友人	.29 *	-.00	.02	.22	.15	.27 *	.50 **	—	.48 **	.39 **
近隣の人	.14	.04	.09	.26 *	.13	.18	.44 **	.48 **	—	.56 **
社会サービス	.26 *	.21	.09	.31 *	.40 **	.28 *	.32 *	.39 **	.56 **	—

*p <.05, **p <.01

4．まとめと今後の課題

本研究では50歳前後の女性を対象に高齢期におけるソーシャルサポート期待と現在の生活状況や生活意識との関連について検討した。今回の対象者は、「暮らし向き」「健康状態」が良好で、7割以上の人が就労および仕事以外の社会的活動に参加しており、社会的意欲、生活の満足度が比較的高い対象であったと考えられる。

高齢期におけるソーシャルサポート期待については、子どもへの期待が最も高く、次いでパート

ナーであった。前原・大城（1997）は、中年期女性を対象にソーシャルサポートのストレス軽減効果を有職、無職別に比較検討した結果、有職無職女性ともに夫や子どもへのサポート期待が高いほどストレスが緩和されることを見出している。今回はストレスについては検討していないが、本研究においても中年期の女性にとっての夫、子どもという身近な家族の重要性が確認された。また、ほとんどのサポート内容に対して子どもへの期待が最も高かったのは、今回の対象者のほとんどが大学生の娘を持つ母親であったことと関連しているかもしれない。家族（子ども、パートナー）以外のサポート源として、友人に対しては趣味や娯楽を一緒に楽しむことを期待していた。これは成人期女性のソーシャルサポートの様相を年代別に検討した西田（2000）の研究で、45歳以上の中年期に相当する年代では「行動して楽しい」という時間を積極的に共有できる対象として友人を選択することが最も多かったという結果と一致する。友人に対しては高齢期においてもコンパニオンシップとしての機能を期待していることが示唆された。

ソーシャルサポート期待と現在の生活状況、意識との関連からは、現在の主観的幸福感がソーシャルサポート期待と大きく関連することが明らかになった。このことはソーシャルサポートがストレスを軽減し心理的適応を高めるというこれまでのソーシャルサポート研究の結果と一致する。本研究では将来のサポート期待を評価させたが、Cohen, Gottlieb & Underwood（2000 田中訳 2005）は健康や適応には実際のサポート受領よりむしろサポートの利用可能性に関する信念（認識・期待）が重要であるとしており、現在の良好な適応がサポート期待に関するポジティブな将来展望をもたらすものと考える。現在の生活状況との関連で興味深い結果として、暮らし向きや健康状態の高さが将来のきょうだいへのソーシャルサポート期待と関連していたことがあげられる。成人期以降におけるきょうだい関係ついてはその機能を検討することの重要性が指摘されているが（前原・大城,1997）、実証的な研究はほとんどない。高齢期においてきょうだいとの良好な関係が QOL に寄与することは明らかであると思われるが、中年期女性にとって良好なきょうだい関係を維持継続していくためにはお互いの生活にある程度のゆとりが必要であることが示唆された。

本研究は予備調査の研究結果であり、本研究の限界として、先にも述べた対象者の偏りがあげられる。今後は、対象者の人数、属性の多様性を確保した上で、家族状況、就労状況別にソーシャルサポート期待を比較すること、ソーシャルサポート期待の内容からみた構造的特徴についてサポート源別に検討することが課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP 26350052（研究代表者：大石美佳）の助成を受けた研究の一部である。

本論文の内容の一部は、日本発達心理学会第27回大会（2016）において発表した。

参考文献

Cohen, S.; Gottlieb, B.; & Underwood, L. “Social relationships and health” Social support measurement and intervention : A guide for health and social scientists. Cohen, S.; Underwood, L.; & Gottlieb, B. New York. Oxford University Press. 2000（田中健吾（訳）. “社会的関係と健康”. 小杉正太郎，島津美由紀，大塚泰正，鈴木綾子（監訳）ソーシャルサポートの測定と介入. 川島書店, 2005, 3-34）

Diener, E.;Emmons, R.A.;Larsen, R.J.; & Griffin, S. The Satisfaction with Life Scale. Journal of Personality Assessment. 1985, 49, 71-75

福岡欣治・橋本宰. 高齢者の過去および現在のソーシャル・サポートと主観的幸福感の関係.静岡文化芸術大学研究紀要. 2004, 5, 55-60

福岡欣治. 大学生における保健行動とソーシャル・サポートー体型認知およびダイエット行動を含

めた検討－．川崎医療福祉学会誌．2011，21，107-113
日潟淳子．中年期における過去，現在，未来への態度と精神的健康との関連．神戸大学発達・臨床心理学研究．2008，7，183-188
日潟淳子．中年期の時間的展望とメンタルヘルス．岡本祐子（編）成人発達臨床心理学ハンドブック―個と関係性からライフサイクルを見る―．ナカニシヤ出版，2010，77-83
五十嵐敦・氏家達夫．中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究－中年期の目標・希望からみた時間的展望の様相についての分析－．福島大学生涯学習教育研究センター年報．1999，4，27-38
柏木恵子．家族心理学－社会変動・発達・ジェンダーの視点－．東京大学出版会，2003
厚生労働省．第22回生命表（完全生命表）の概況．2017．http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/22th/（アクセス2017年８月４日）
古谷野亘・矢部拓也・西村昌記・ 高木恒一・ 浅川達人・ 安藤孝敏．地方都市における高齢者の社会関係－気心が知れた他者の特性－．老年社会科学．2007，1，58-64
前原武子・大城麻理．中年期有職女性と無職女性のストレスとソーシャルサポート．琉球大学教育学部紀要．1997，50，297-306
増渕裕子・松永しのぶ・大石美佳．中年期女性における「ひとりの時間」の意味－青年期との比較－．昭和女子大学紀要．2016，18，31-43
松永しのぶ・大石美佳．成人女性の生活意識と将来展望－高齢期におけるソーシャルサポート期待に着目して―．日本発達心理学会第27回大会発表論文集．2016，213
三浦正江・上里一郎．高齢者におけるソーシャルサポートの受領および提供とメンタルヘルスの関連－性別による違いに着目して－．東京家政大学研究紀要．2012，52，41-46
森慶輔・三浦香苗．ソーシャルサポートの文献的研究－ストレスに対する多様な影響に焦点を当てて－．昭和女子大学生活心理研究所紀要．2007，10，137-144
西田裕紀子．成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究．教育心理学研究．2000，48，433-443
大石美佳・松永しのぶ．成人女性の生活意識と将来展望－喪失感と獲得感の予備的検討－．鎌倉女子大学紀要．2015，22，43-50
大石繁宏．幸せを科学する－心理学からわかったこと－．新曜社，2009
岡本祐子．女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟．北大路書房，1999
嶋信宏．大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究．教育心理学研究．1991，39，440-447
種市康太郎．ソーシャルサポートと健康．小杉正太郎（編）．ストレスと健康の心理学．朝倉書店，2006，35-51
都筑学．時間的展望研究の理論と課題．都筑学・白井利明（編）．時間的展望研究ガイドブック．ナカニシヤ出版．2007，11-28
堤明純・萱場一則・石川鎮清・苅尾七臣・松尾仁司・託摩衆三．Jichi Medical School ソーシャルサポートスケール（JSS‐SSS）：改訂と妥当性・信頼性の検討．公衆衛生学雑誌．2000，47，866-878
山岡もも・松永しのぶ．高齢者の友人関係－友人関係機能、友人関係満足度と主観的幸福感との関連－．昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要．2013，868，9-19
柳沢理子・馬場雄司・伊藤千代子・小林文子・草川好子・ 河合富美子・山幡信子・大平光子．家族および家族外からのソーシャル・サポートと心理的 QOL との関連．日本公衆衛生雑誌．2002，8，766-773

要旨

本研究では、中年期女性の高齢期におけるソーシャルサポート期待についてサポート源別に検討した。76名の中年期女性が回答した質問紙調査を分析した。高齢期におけるソーシャルサポート期

待は、子どもに対する期待が最も高く、次いでパートナーであった。主観的幸福感は、友人以外のすべてのサポート源に対するソーシャルサポート期待と正の相関がみられた。また、社会的活動への参加数は友人および社会サービスに対するソーシャルサポート期待と正の相関、暮らし向きと健康状態は、きょうだいに対するソーシャルサポート期待と正の相関がみられた。

（2017年 8 月 7 日受稿）